

7「ほっとスペースさくらさくら」(東京都町田市)

1. 概要



運営主体	町田・ワーカーズまちの縁がわ小山田桜台		
所在地	東京都町田市	人口規模*	430,215 人(R4.2 現在)
活動展開の範囲	東京都町田市北部に位置する小山田桜台団地及び近隣地域		
活動拠点の種類	空き店舗 (小山田桜台団地内にある UR 団地商店街の一画)		
活動開始年	2020 (R2) 年		
活動概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小山田桜台団地及び周辺の住民にとっていつでもだれでもが訪れることができる「まちのほっとスペース」という居場所をつくり、地域で安心して暮らし続けられるまちづくりにつなげる。 ・ 団地の一角にある空き店舗を借り、住民が立ち寄れる居場所として惣菜や壺焼き芋、パン・スープ販売、BOX・オープンスペースの提供、生活支援、相談、見守り等の事業を行っている。 		
対応する地域課題	地域のつながりの希薄化 生活支援ニーズの増加 就労や社会参加の機会がない(乏しい) こと		

*人口出典：町田市 WEB サイト「人口・世帯」 <https://www.city.machida.tokyo.jp/shisei/toukei/setai/>

2. 活動の展開プロセス

■ 地域の状況

- ・ 40 万人都市の町田市にあるが、バスに乗って 30 分程度かかる交通過疎地域に位置する団地。交通弱者の方々が互いに徒歩圏内で助け合っているのが現状である。
- ・ 団地の傾向としては元ファミリー層で、団塊の世代の方々が多数の傾向にあった。老夫婦や単身の方が多く、70~80 代が増加している。
- ・ 徒歩圏内にあった 2 か所の診療所が撤退したため、医療へのアクセスも悪くなってしまった。
- ・ 交通の便が悪いことや、商店街に若い世代にとって魅力的な事業者が入っていないことから若い世代が定着しない。小山田団地の高齢化率は 47.4%、賃貸住宅の退去率が約 60%に達している。

■ 小さなお茶会の開始

- ・ 団地の居住者は後期高齢期に差し掛かる人が多く、周囲で知らないうちに退去していることがあるなど、住民同士のつながりが希薄化していた。そこでまずは知り合っている者同士がコミュニケーションをしようと考え、小さなお茶会を始めた。生活協同組合や NPO 法人の支援があったことからスムーズにスタートを切ることができ、小山田桜台団地の住民の方を中心に自由参加で開催していた。

■ 場所の確保

- ・ 団地の集会室や他の場所を転々としながらお茶会をする中で、目の前の団地商店街の一角が空くことを知り、その場所を借りたいと考えた。町田市の高齢者支援センター（地域包括支援センター）と町田市社会福祉協議会に相談に行った。
- ・ 高齢者支援センター（地域包括支援センター）は、相談を受ける中で大きな話であることから、高齢者福祉課（地域支援事業担当課）につなげた。これにより、活動者と高齢者福祉課で桜台の状況について問題点を共有できた。
- ・ 場所（UR 団地の一角）を優先的に借りるにあたり市の推薦状が必要であったことから、高齢者福祉課が活動目的や内容を丁寧にヒアリングした上で推薦状を作成し、場所を借りることができた。同時並行で、高齢者福祉課は、生活支援コーディネーターや地域の主要な団体の紹介や補助金の情報提供等の支援を行った。

POINT

活動拠点の確保

小さなお茶会を開く中で空き店舗に注目し、
高齢者支援センターに相談に行った。
センターから高齢者福祉課の窓口につなげてもらったことで
場所を借りるための推薦状を作成してもらい、場所を借りることができた。

■ 資金作り

- ・ 場所を確保してから、改修工事に約 400 万円、厨房の設備費に約 100 万円の費用がかかることがわかった。当空き店舗を借りる上では、スケルトンの状態から改修工事をしなければならないというルールがあったため、想定以上に高額になってしまった。地域の社会資本や公共財の活用という意味では、小さな団体が負うものが大きい。例えば、居抜きで借りられるようになったり、市民による公民館的な活動に家賃補助をいただいたりできればありがたい。
- ・ 活動拠点でのお惣菜販売で 1 日 30,000 円を目標として平均 25,000 円を売り上げ、返済に向けて頑張っている。
- ・ また、6 つの助成金の申請にチャレンジし、実施団体内部で夜な夜な苦勞して作成した結果、5 つから助成を得ることができた。
- ・ 高齢者福祉課からも補助金の情報提供を行っており、立ち上げ前は「高齢者生きがい活動促進事業」、立ち上げ後は町田市の「生活支援団体」の適用を受けて「生活支援団体ネットワーク」での各種支援及び「生活支援団体補助金制度」での補助を受けている。

POINT

活動資金の確保—助成金とお惣菜の販売

場所を確保してから改修工事に多額の費用がかかることが分かった。
地道に惣菜を売り上げながら返済している。
高齢者福祉課から補助金・助成金の情報提供も得て、
自力で申請書を作成した結果、5 つの補助金・助成金を得た。

■ 活動開始

- ・ ほっとスペースさくらさくらでは以下の事業に取り組んでいる。
 - ・ ほっとスペース事業：高齢者をはじめとした地域住民がいつでも誰でも立ち寄れる「居場所」で惣菜販売、パン・スープ販売、レンタル BOX 及びオープンスペースの提供を行う。現在販売は週 6 日間で、惣菜部門とパン・スープ部門がそれぞれ週 3 日営業している。レンタルボックスは 18 個あり 50 名が利用している。手芸作品や木工細工等を展示ができることが好評である。

- ・ほっとサービス事業：買い物や部屋の片づけ、ごみ出し、話し相手等ちょっとした困り事への支援を提供する。利用は 30 分 500 円。利用者も支援者も会員となる。
- ・相談事業：相談内容に応じて適切な窓口（役所等）につないでいる。新型コロナウイルス感染症のワクチン予約の手伝い等も行った。
- ・あんしん見守り事業：惣菜等の配食サービスをする中で、宅配先の方の見守りをやっている。
- ・その他、常設のフリマを設け、寄付された物（衣類、布類、食器、装飾品等）の販売もしている。
- ・子ども食堂の活動者からの提案を受けて「ほっとスペースさくらさくら」の場所を貸して、子ども食堂「みんなの子ども食堂 さくらんぼう（以下、「さくらんぼう）」を実施している。
- ・「ほっとスペースさくらさくら」の活動メンバーは総勢 25 名（子ども食堂部門「さくらんぼう」のメンバーを除く）。運営委員・サポーター・ボランティアに役割が分かれている。運営委員は運営委員会に参加でき、1 票の議決権を持ち、サポーターは、実際に活動に携わる又は寄付で支援するという役割を持つ。

■子ども食堂の活動への展開

- ・2020（R2）年 10 月のオープンの頃、団地在住で子ども食堂の活動場所を探していた方から、「ほっとスペースさくらさくら」の場所を使いたいとのアプローチがあった。その後、運営会議で諮り、2020（R2）年 12 月に承認された。その後準備を経て、2021（R3）年 2 月に子ども食堂「さくらんぼう」の活動が開始した。
- ・「さくらんぼう」の活動について、本来はみんなで会食をして大人と子どもをつなぎたいが、コロナ禍のため現在はお弁当を配布している。子どもは無料、大人は 500 円（子どもの食事代の支援になる）でお弁当を受け取れる。利用者数は平均して、子ども 27 人、大人 23 人。最初は月 2 回の定期開催であったが、昨年 11 月からは月 4 回になり、週 1 回のペースになっている。ボランティア登録が 57 名、実際の稼働は約 20 名。「さくらんぼう」の代表と副代表は「ほっとスペースさくらさくら」の運営委員として会議に出席しており、一緒に活動をしている。

「さくらんぼう」運営者の声は次頁へ

■「ほっとスペースさくらさくら」を拠点に住民活動が活性化

- ・その他にも、他の住民活動の拠点として機能している。例えば、壺焼き芋（起業支援）、スープとパン（起業支援）、いちごカフェの焼き菓子販売、似顔絵等、様々な活動に使われており、「ほっとスペースさくらさくら」の活動の幅が広がっている。

■外部との連携が進む

- ・2021（R3）年は城南信用金庫や蕎麦打ちの団体、個人企業とのコラボレーション企画を実施した。
- ・コロナが少し落ち着いていた時期には、近くの大学の学生が「ほっとスペースさくらさくら」の厨房やフロアの仕事にボランティアで関わっていた。今後もコラボを進めていきたい。

■仲間・参加者集め

- ・参加者集めはなかなか難しく、さくらさくら通信を発行して桜台団地の 1,400 世帯に配布している。近所に配布する際には仲間にならないか、と呼びかけをしている。Instagram も活用して呼びかけを行っている。フルタイムの仕事ではないので、自分のペースで活動に参加できるので他の活動との掛け持ちで参加してくれる人が多く、多彩な顔触れになっている。

仲間・参加者集めの工夫—通信の配布と SNS の活用 POINT

さくらさくら通信を作成して団地に居住する 1,400 世帯に配布。
また SNS も活用して情報発信をしている。
自分のペースで働けるため、何かしながら掛け持ちで参加してくれる人も多い。
多彩な顔触れになっている。

3. 参加者や家族、近隣の人々への影響や効果など—子ども食堂部門「さくらんぼう」の視点から

「ほっとスペースさくらさくら」が拠点となって、様々な住民主体の取組を後押しすることができている。ここでは、「ほっとスペースさくらさくら」の場所を使って新たに活動を立ち上げた子ども食堂「さくらんぼう」の運営者の声を紹介する。

- ・ 小山田桜台団地在住（約 10 年）の女性（2 児の母）は、日々の仕事や育児の中で子どもの格差や虐待等に関して忸怩たる思いを持ってきた。そのような中でコロナ禍に突入したことをきっかけに、子どもにつながるをすることのできる子ども食堂の立ち上げを考え、町田市の子育て支援課に相談に行った。そこで子ども食堂の立ち上げに関する情報提供を受け、場所の候補として当時まだ立ち上げ準備中だった「ほっとスペースさくらさくら」を紹介された。町田市に紹介されるまでは、団地内で「ほっとスペースさくらさくら」の取組が始まろうとしていることは知らなかった。
- ・ 子どもの貧困について「つながりがないこと」が課題だと考えていた中で、「ほっとスペースさくらさくら」も高齢者を対象として同じ課題感や志を持っていたことから魅力を感じ、「ほっとスペースさくらさくら」にアプローチした。その後、「ほっとスペースさくらさくら」の運営委員会の承認を得て、子ども食堂部門「さくらんぼう」の活動が始まった。「さくらんぼう」は、福祉利用であることから場所の使用料の支払いを免除されたことで、立ち上げからの 1 年間、赤字にならずに運営することができた。
- ・ 「ほっとスペースさくらさくら」と「さくらんぼう」の活動では高齢者と子どもが日常的に関わることができており、「さくらんぼう」の代表は、大人と子どもがお互いに名前を覚えあい多世代の人がつながっていきおり、子どもが信頼できる大人とつながればつながるほどセーフティーネットの網の目ができてきていると感じている。
- ・ 「さくらんぼう」の代表自身が仕事と子育て、さらに子ども食堂の運営をしている。運営メンバーも子育て世帯の共働きの親が中心であることから、仕事と家庭で手一杯である世帯が多い。そのような中で「ほっとスペースさくらさくら」の惣菜部門の方にお弁当を作ってもらったり、「ほっとスペースさくらさくら」のおばあちゃんが子ども食堂のお弁当を買って応援してくれたりすることもある。「なかなか子どもと接する機会はないが、お手伝いすれば接することができるから」と言っていただけなのはありがたく、「ほっとスペースさくらさくら」という場所で子ども食堂ができたことの意義は非常に大きいと感じている。
- ・ 子ども食堂で配布できるお弁当には数の限りがあることから、団地内の 3 か所に掲示しているのみで積極的な広報はしていないにもかかわらず、団地内だけでなく違う学校の子供達も来ており輪が広がっていると感じる。
- ・ また、奇特な人にしかできない支援方法では支援の輪が広がっていかないと考えており、仕事や家庭のことで忙しい人でも無理なくボランティアに参加できるよう、参加のハードルを低くするよう意識している。その結果、気軽に参加できることがありがたがられており、近所の人だけではなく遠方から来てくれるボランティアの方もいる。「みんなのちよとずつを集めて力にする」ということを考えている。
- ・ 今後は「ほっとスペースさくらさくら」の拡大（下記参照）に伴い、維持管理に関わっていくため、収入の工夫が今後の課題である。

4. 今後に向けて

(1) 今後の展望

■ 拠点の拡充

- ・ ほっとサービスや何気ない相談、多世代交流の場所にしたいと思っていたが、当初の予定よりも厨房の部分が広く（全体の 2 分の 1 程度）なってしまったことからフロアが狭くなり、大人数集まるとの活動が難しい状況になっている。そのような中で、隣の店舗が空いていたので、運営委員会で隣の店舗を新たな多世代交流の場にするということを決めた。「ほっとスペースさくらさくら」が全てを担って運営するのは負担が大きい

ため、隣の店舗はオール桜台で進めている。小山田桜台まちづくり協議会、自治連合会、自治会、桜美林大学、まちづくり協議会がお世話になっている個人の方、城南信用金庫に協力いただき、準備会が立ち上がり、仮契約まで終わっている。今後、本契約して改修工事に入る。一番大変なのは、やはり資金面であり、桜台団地の住人に、このプロジェクトについて説明して寄付を募っている。加えて、立上げ準備会の方も少しずつお金を出し合って、改修費をどうにか集めた。多世代交流をしたいが、コロナ禍のためどのような形で事業運営をすれば毎月の家賃や共益費が支払えるかが検討課題となっている。

■生活支援のメニュー拡充

- ・ 桜台団地からでられない方々もいるため、洋服、日用品（タオルや靴下パジャマ）、介護用品などの業者に依頼して出張販売なども行ってみたいと考えている。

■スタッフ確保

- ・ スタッフの確保が課題となっている。城南信用金庫からランチを毎日作ってほしいとの依頼があったが、人手が足りず提供できていない。城南信用金庫からの依頼が受けられれば、安定した経営にもつながると考えている。ボランティアには団地の外の方や学生も入っているが、まだ本格的にスカウトができていない。今後、大学のボランティアサークルにもアプローチしていこうと考えている。

(2) 自治体・社協・包括等に期待すること

- ・ 自らの利益を求めるような活動ではなく、公共的な活動として多世代の集いの場を運営しており、「市民版公民館」のような役割を担っていると自負している。このような活動を行うところには、家賃補助があると活動が進めやすくなる。
- ・ 衛生管理や生活支援に関する研修を希望している。「ほっとスペースさくらさくら」は管理栄養士が2名、「さくらんぼう」にも栄養士が1名おり、衛生管理責任者は総勢6名いる。に則って独自の「衛生管理マニュアル」なども作っているが、調理従事者が保健所の衛生管理に関する研修を受けられず、ZOOM 受講も対応していない。ほっとサービスで行うような生活支援についても、基本的な研修などがなかなか受けられないのが実情で、スキルアップするチャンスがない。
- ・ 団地の空き室を有効活用して、災害の際や一人暮らしが不安な方が少しの間一緒に生活するような使い方ができればよいと考えている。24時間365日居住をともにするのではなく、不安な時にリラックスして暮らして、元気になって自分の家で頑張れるという多様な居住支援が考えられたら、この賃貸住宅を有効に使えると考えている。そういう働きかけをURや市役所にしてきたが、コモンスペースにまで行き着いていない。何か支援があればうまく協働できると考えている。

活動団体の情報	<p>町田・ワーカーズまちの縁がわ小山田桜台「ほっとスペースさくらさくら」 東京都町田市小山田桜台 1-20UR テナント団地内貸店舗 5号室 TEL&FAX 042-860-1009 Email sakurasakura@bh.wakwak.com SNS Instagram</p> <p>視察受け入れ：可 (事前にご希望の日程と、人数、視察の目的をお知らせください)</p>
---------	---